

Title	ヨーロッパ哲学の足跡
Sub Title	Die Spur der europaischen Philosophie
Author	立野, 清隆(Tateno, Kiyotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.35- 51
JaLC DOI	
Abstract	Die metaphysisch gepragte Weise des menschlichen Vorstellens findet uberall nur die metaphysisch gebaute Welt. Die Metaphysik gehort zur Natur des Menschen. Die Metaphysik ist in allen ihren Gestalten und geschichtlichen Stufen ein einziges, aber vielleicht auch das notwendige Verhangnis des Abendlandes und die Voraussetzung seiner planetarischen Herrschaft. Das ego cogito ist fur Descartes in allen cogitationes das schon Vor- und Her-gestellte, das Anwesende, Fraglose, das Unbezweifelbare und je schon im Wissen Stehende, das eigentlich Gewisse, das allen vorauf Feststehende, namlich als jenes, das alles auf sich zu und so in das gegen zu anderen stellt. Zum Gegenstand gehort zumal der Was-bestand des Gegenstehenden (essentia-possibilitas) und das Stehen des Entgegenstehenden (existentia). Der Gegenstand ist die Einheit der Standigkeit des Bestandes. Der Bestand in seinem Stand ist wesenhaft bezogen auf das Stellen des Vorstellens als des sichernden Vor-sich-habens, Der ursprungliche Gegenstand ist die Gegenstandigkeit selbst. Die ursprungliche Gegenstandigkeit ist das Ich denke im sinne des ich percipire, das allem Percipierbaren im voraus schon sich vorlegt und vorgelegt hat, subiectum ist. Das Subjekt ist in der Ordnung der transzendentalen Genesis des Gegenstandes das erste Objekt des ontologischen Vorstellens. Die neuzeitliche Gestalt der Ontologie ist die Transzen- enntnistheorie wird. Und die Seiendheit wird jetzt die Gegenstandigkeit. Die Erkenntnistheorie ist Betrachtung, Θεωρια, insofern das ov, als Gegenstandigkeit und deren Ermoglichung befragt wird. Die Erkenntnistheorie und was man dafur halt, ist im Grunde die auf der Wahrheit als der Gewissheit des sichernden Vorstellens gegründete Metaphysik und Ontologie.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーロッパ哲学の足跡

立 野 清 隆*

Die Spur der europäischen Philosophie.

Kiyotaka Tateno

Die metaphysisch geprägte Weise des menschlichen Vorstellens findet überall nur die metaphysisch gebaute Welt. Die Metaphysik gehört zur Natur des Menschen. Die Metaphysik ist in allen ihren Gestalten und geschichtlichen Stufen ein einziges, aber vielleicht auch das notwendige Verhängnis des Abendlandes und die Voraussetzung seiner planetarischen Herrschaft.

Das ego cogito ist für Descartes in allen cogitationes das schon Vor- und Her-gestellte, das Anwesende, Fraglose, das Unbezweifelbare und je schon im Wissen Stehende, das eigentlich Gewisse, das allen vorauf Feststehende, nämlich als jenes, das alles auf sich zu und so in das «gegen» zu anderen stellt.

Zum Gegenstand gehört zumal der Was-bestand des Gegenstehenden (essentia-possibilitas) und das Stehen des Entgegenstehenden (existentia). Der Gegenstand ist die Einheit der Ständigkeit des Bestandes. Der Bestand in seinem Stand ist wesenhaft bezogen auf das Stellen des Vorstellens als des sichernden Vor-sich-habens, Der ursprüngliche Gegenstand ist die Gegenständigkeit selbst. Die ursprüngliche Gegenständigkeit ist das «Ich denke» im sinne des «ich percipire», das allem Percipierbaren im voraus schon sich vorlegt und vorgelegt hat, subiectum ist.

Das Subjekt ist in der Ordnung der transzendentalen Genesis des Gegenstandes das erste Objekt des ontologischen Vorstellens. Die neuzeitliche Gestalt der Ontologie ist die Transzen-

* 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)

... Erkenntnistheorie wird. Und die Seiendheit wird jetzt die Gegenständigkeit. Die Erkenntnistheorie ist Betrachtung, *θεωρία*, insofern das *ὄν*, als Gegenständigkeit und deren Ermöglichung befragt wird.

Die Erkenntnistheorie und was man dafür hält, ist im Grunde die auf der Wahrheit als der Gewißheit des sichernden Vorsehens gegründete Metaphysik und Ontologie.

1

我々が自然や人間の歴史又は我々自身の日常的な生活経験を全体として考察してみる時、差し当って我々の前に現われるものは、漠然と無分節的な存在の塊りの如きもの、即ち諸々の連関と相互作用との複雑に絡み合ったまま変化流転する、渾沌とした全体の姿であって、その中では個々の事物や事象は、こうした全体的な運動連関の背後に隠れて確定的に規定することが出来ず、それらの因果関係も複雑で、一切の合理的・一義的な説明を許さず、同一性の論理を以てしては決して捉えることの出来ない、生成変化流転してやまない世界であって、ヘラクレイトスは此の世界を万物は自らの中に対立矛盾を含むことによって不断に生成と消滅とを繰り返す、固定不動的に存在する何ものも存在せず、万物は存在して然も存在しないと語っている。それは又ベルクソンの云う「純粹持続」(*duré pure*)の世界でもあり、又W・ジェイムズの「純粹経験」(*pure experience*)の世界でもあり、仏教を始めとする東洋的な自然経験一般でもあると云って差支えないであろう。

然しながらこうした見方や考え方は、諸現象の全体の姿を一般的な性格において正しく捉えているとはいふものの、我々が知性の正しい行使によって、かかる生成変化流転してやまない現実の世界に対処しつつその中で生活してゆく為には、此の全体の姿を構成している個々の事物や事象を、自然的又は歴史的連関の中から取り出して、それらの特殊な原因や結果などに従ってそれらを研究し、正しく認識することが必要で、此のことが差

し当っての科学的認識の出発点となる。かくて人間知性の正しい行使、厳密な思考の展開の為の拠り処として、一つ一つの事物についてそれが「何であるか」(本質)ということと、そのような「何かである」事物が現実的に存在していること「実存」(現実存在)とに分けて、「何かとして現実的に存在する事物」として固定不動的に把握することを目指して、此処に変化流転の中であって恒常不変的に存在するものこそ、真実に存在するものとして認識の対象とされるべきことが主張され、かかる事物の「何であるか」を「……」として概念的に定義することが、ソクラテス及びプラトンの哲学的課題とされたのである。即ちアテナイの市民的諸徳である正義、勇氣、節制、敬虔等々の諸徳(アレテー)の概念的定義から進んで、存在する限りにおける一切の存在者について、その「何であるか」(本質)を厳密に規定するべく、無限に之を追求していったところに、ロゴスの思惟を中心とするヨーロッパ哲学の伝統が形成されたものということが出来る。

2

アリストテレスによれば、一方我々が生成発展過程の見地に立ってみる時、かかる変化の中であって恒常不変的に存続するものは、かかる生成発展活動がそれを目指して行われる目的的な「何か」、即ち形相的本質的なもの、プラトンのいわゆるイデアがそれに該当すると考えられるのに対して、他方衰滅し腐朽してゆく過程の視圈から見ると、かかる変化の中であって不変的に持続するものは、物質的な質料的素材的なもの、ヒュポケイメノン(基体)として根底に横たわるもの、地水火風の四元素的なるものであり、そして更に生成的にして且つ衰滅的な両過程の全体、即ち真にその具体的全体的な生成変化の過程の中であって、恒常不変的に存在するものは、その都度の「今」において現在する具体的個別的なるものの現存そのことであり、前二者は此の具体的個別的なるものの現存そのことを成

り立たしめる為の内的原因であるということになる。「ヒュポケイメノン(基体)はウーシア(存在者の存在)であるが、之は或る意味においては質料であり、又他の意味においては概念或いは形相であり、第三の意味では之等質料と形相とから成る具体的個物者である。そして此の第三のもののみ生成と消滅とがあり得、之のみが端的に独立してあり得るものである」(形而上学八巻一章)。

共にウーシアとして語られうる三者のうち、形相と質料とは、第三の具体的個物者の現存そのことを成り立たしめる内的原因として、之等三者を統一的全体的に把握することの為には当然アリストテレスは、生成発展過程と衰滅腐朽過程という、絶対否定的にその方向性を異にする両過程を、無媒介的に相即せしめつゝその対立矛盾の全体性において把握しうる、より高次の視圏に立ち(ヘラクレイトス)、それを確定する方途を探求しなければならなかったのであるが、そのような困難な道を選ぶことを避けて、衰滅的腐朽過程を単に生成的発展過程の為の媒介乃至派生的なもののみとみなすことによって、実質上生成発展過程に内属せしめた為、質料因の形相因に対する絶対否定的な抵抗性格を稀薄ならしめ、結局質料を「可能態においてある形相」の意味に、又形相を「現実態においてある形相」の意味にそれぞれ解することによって、形相的本質一般の地平内における可能態と現実態との関係の問題に単一化せられ、可能態から現実態へ、そして完全現実態へという、形相の自己実現を目指す不可逆的な目的論的發展活動そのものとして形相一元的に把握され、アリストテレスにおけるプラトニズムの徹底をそこに見る結果に終わったのである。かくて質料的なものすべては、形相的なもののデュナミス乃至はその実現の為のエネルゲイアということになったのである。

3

生成変化流転してやまないカオスとしての現実世界の中であって、その

都度常に現存する具体的個別的な事物こそ、正に真にウーシア（存在）と呼ばれなければならない、かくてアリストテレスにとって探求されなければならない唯一の哲学的課題は、存在者として存在する限りにおける一切の存在者（個体）の存在とは何かということになる。そこでアリストテレスはかかる個体的な事物について、一方それが「何であるか」(quidditas)ということと、その存在者が存在するか又は存在しないかという「事実」とを区別して、前者を「本質-存在」(Was-sein, essentia)、後者を「事実-存在」(Daß-sein, existentia)と呼び、^{ザイン}存在（ウーシア）はかくて「本質-存在」と「事実-存在」とに区別され、此の区別付けを以て形而上学（哲学）の歴史が始まったのである。

本質 (essentia) は或る存在者について、それが「何であるか」(τὶ εἶναι) の問いに答えるものであり、又実存 (existentia) は或る存在者についてそれが存在すること (ὅτι εἶναι) を言表し、此の区別づけはそれぞれ異なった「存在する」(εἶναι) を名指している。アリストテレスにとって存在するものとは、その都度のあれこれの個物 (τὸδε τι) であり、一つの静止せるものであるが、それは生成的にして且つ衰滅的な運動の一つの特殊な在り方で、静止において運動は完成され、動かされたものは一つの現前することの中で存在するものとなり、運動と静止とはかくて現前性 (ὄψια, Anwesenheit) として特徴づけられる。そこに立っている家はその外見 (Aussehen) の中で露呈され、この露呈された非隠蔽性 (アレーティア) における姿、形の中に存立せるものとして存在し、此の姿、形の外見の中に静止している。静止は家を建造することのすべての運動を自らの中に集摂し、単なる終結の意味ではなく、完成された作品 (ἔργον, Werk) として終止している。作品とはエイドス (形相) を呈するものの静止的終結に達した、非隠蔽性における現前を意味する故、現前性 (ὄψια) 又はエネルギー (ἐνεργεια) と呼ばれる。エネルギーとは此のように個々の存在するもの、その都度完成に達して終結し静止した個体的なものの^{ウーシア}現前性を意

味し、エンテレケイアもエネルゲイアと同じ意味で用いられている。

第一義的な^{ウーシア}現前性とは存在すること ($\delta\tau\iota\ \epsilon\sigma\tau\iota\nu$) の意味に解された存在、「事実-存在」(existentia) であり、第二義的な^{ウーシア}現前性は「何であるか」($\tau\iota\ \epsilon\sigma\tau\iota\nu$) において問われている存在、「本質-存在」(essentia) であり、両者はその根本性格がエネルゲイアである、可能的なもの(質料)の現実化(形相)としての、現前するものの二つの在り方として示される。両者の間の区別付けは^{ウーシア}存在(現前性)自体に由来し、ウーシアの此の二つの在り方、イデアとエネルゲイアとは、その様々な区別づけの変動を通して、存在者そのもののすべての真理の根本的立場を呈供してゆくこととなる。

4

イデアは^{イデー}理念となり、それは更に表象 (Vorstellung) となる。又エネルゲイアは現実性 (actualitas, Wirklichkeit) となり存在する事実の確認に関わり、それが存在するとみなされる時存在の本質の自明性を可能にする。エネルゲイアが現実性 (actualitas) に変様して以来、現実的なものが本来的存在者であり、従って又それはすべての可能的なもの必然的なものにとっても基準となる存在者とされる。存在をイデア即ち善 ($\alpha\rho\alpha\theta\acute{o}\nu$) とみなすプラトンの存在規定に従って、存在の本質の内における「原因」が^{アイチア}決定的役割を演じ、或る存在者の発生 (Ent-stellen) には、常にそのものの属する「本質-存在」からの発生が働いている。此の「本質-存在」がそれぞれの事象の事象性 (Sachheit) 即ち原因 (Ursache) であり、従って存在とはそれ自体において原-因的である。そこに^{アルミー}始元性格の^{アイチア}原因性格への変様が始まり、始元と原因との同一視が自明のこととなる。

存在がエネルゲイアとなり更にそれが現実性へと変移する時、存在するものとはエネルゲイアの能動の結果としての現実的なものであり、それ自身原因となる^{アルミー}作為的なもの (Machen) の意味における作用によって規定される。今や現実性としての存在規定はその優位を確定した後、現実性が

「事実 - 存在」(existentia) の真の本質をなすが故に、現実的な存在者が真の存在者であるということになる。つまり現前するものがより持続的に滞在すればする程、それはより現実的であるからで、個々の事物の充たされた現前が即ちそれである。現実性とは原因性であり、現実性としての存在が帯びる原因性格は、それが存在しないことはあり得ない存在者であるという、最高の意味で存在の本質を充たしている存在者（実存することを本質とする必然的存在者・神）において最も純粹に示される。

現実的なものとは実存するもののことである。それは因果関係の何等かの仕方を通じて、原因の外側に存立せしめられたすべてのものを包括する。可能ならしめること、原因をなすこと、根拠づけることに発する存在の本質の来歴は、形而上学の歴史全体を貫いて支配している。かくて第一原因としての創造神を第一の作用者とみなして、その作用の結果である世界、そして此の世界の内部では人間が本来の作用者であるとされて以来、神、世界、人間という現実的なものの之等三者中の何れか一つが、現実性の本質を刻印する役割を演じ、真理は形而上学の歴史の中で、いつしか人間的乃至神的な知性へと変移し、やがてその窮極的本質として確実性(Gewißheit) という真理性に達する。此の名称は真理が意識(Bewußtsein) に関係していることを表明している。即ちそこでは自己自身及び知の対象を明確にそれと知り、且つ此の知の中に自己自身を確保しうる知のみが知とみなされている。かくて二つの現実性、神と人間とは共に認識する存在者として真理の担い手であり、同時に知と確実性の現実性を形成する。確実性の本質には常に自己自身を確めていることが含まれており、自己自身とその作用の確実性が人間の現実性を規定する。真理が自己自身を確保する人間存在の知の確実性になる(デカルト)と同時に、近代と呼ばれる歴史が始まる。

今や現実性とは確実な表象作用を通して、且つ此の表象作用によって定立された存在性という意味での被表象性ということになる。確実性の掲げ

る要求は、絶対的な不動の基礎それ自体において存立する一つの土台 (subjectum) に向けられる。エネルゲイアから actualitas への変移の場合と同様、ヒュポケイメノンから subjectum への変移において、それはその上に他のものが立てられる根拠の役割を引き受け、その結果下に据えられたものは又下に存立するものとして、それはすべてに先んじて存立するもの、実体 (substans) として把握される。基体と実体とは現実性と存立性とを満足せしめるものとして、実体性 (substantia) と呼ばれるものを意味し、ウーシア (現前性) は実体性として思惟され、かくて実体概念がその後の形而上学における存在本質の形成を支配することとなる。

5

端緒における形而上学が、エネルゲイアを現実性 (actualitas) に、ウーシアを実体 (substantia) に、アレーテイアを適合 (adaequatio) に変移せしめると同様に、ロゴスは、そしてそれと同時にヒュポケイメノンは ratio (話・言葉・理性・陳述・根拠・理拠・弁明) という訳語の意義圏に属することとなる。かくて理性 (ratio) は基体、即ち下に横たわるものの別名となり、存在者の存在性の本質として理解された根拠 (ratio) が、その後の形而上学において^{ラチオ}理性という名称を授けられる。すべての存在者 (基体) はその存在 (esse) が、表象 (perception) と意欲 (appétition) という力 (vis) によって規定されている限り モナドと呼ばれ、かくてライブニッツによって初めて、確實性としての真理の光の中に展開される本質、即ち思惟するもの (res cogitans) の確實性の本質は、単にデカルトの主観的自己意識を超えて、一切の現実的なもの、存在する限りにおける一切の存在者を支配するだけの拡がりを獲得することとなる。意欲的 - 表象的な作用が、個々の基体 (存在者) の存在 (esse) の持つ本質であって、此の本質が実存 (existentia) の根本特性をなす。即ち表象的 - 志向的な存続性が実存の本質である。

「存在すること」の意味での存在とは、或るものが存在して無ではないということの意味し、かくて「事実-存在」(Daß-sein, existentia)は無即ち絶対的非存在に対する絶対的否定の働きとして、無ではなく存在することを意欲し選び取ったものとして、^{エッセ}存在は作用の本質の中に含まれることとなる。「実際何も無いことの方が、何かが存在することよりも簡単で容易である」にも拘わらず、「何も無いのではなく何かが存在するのは一体何故であるのか」。それ故「何ものも十分なる根拠なしには存在せず」という形而上学的大原理 (große Prinzip) に基づいて、すべての存在者は必然的に自らの「その故に」を、つまり根拠を持たなければならず、実際我々がすべての存在するものに対して、根拠づけを要求してゆくことには、一つの必然的な意味があることとなる。かくてすべての存在者は根拠つまりヒュポケイメノン、基体 (subiectum) である。現実性としての存在は一つの根拠づけること、根拠の根拠である。根拠づけはそれ自体において無よりも存在することに優先権を与え、本質的に存在を好み且つ可能にするという性格を持たなければならない。存在し実存しようとすること (existituiere) とは一つの欲求で、そこには自己実現への志向、実存することへの衝動が秘められている。一切の存在者はその存在において自己自身を意欲する欲求者であり、表象的-志向的という意味での^{エクジステンツ}実在、^{アクチュアリタス}モナドであり、之が現実性の新しい本質となる。それぞれのモナド的な実在は根源的に一体化しつつも、それぞれが各自の視点から宇宙の遠近法としての一世界を映現しつつ、自性自現 (ereignen) することによってのみ存在する。

基体性という言葉は、存在が基体から由来していることを示しても、未だ一つの自我によって規定されているとは限らないのに対して、主体性 (Subjektivitat) という語は近代形而上学の進展と共に自我 (Ichheit) を、そして特に精神の自己性 (Selbstheit) を、真なる現実性として要請したところのものに他ならない。^{ザイン}存在は形而上学としてのその歴史において常

に^{ヒュポテイメノン}基体性である。然し基体性が主体性となる時、^{エゴ}自我が多義的な優位を占め、或る時は自我は确实性の要求の下に真なる存在者となり（デカルト）、更に精神の段階におけるモナド的存在者としては、その表象的志向作用によって現在化を実現することが可能となる（ライプニッツ）。近代的形而上学の発生以来存在とは意志、即ち本質の要求（*exigentia essentialis*）である。意志は理性の意思、精神の意志、愛の意志そして力への意志である。近代形而上学が、そして形而上学一般が完成に近づくに従って、擬人主義が真理として要求され根拠づけられるが、此のことはニーチェによって顕著にそして徹底した方法によって遂行される。

6

近世の形而上学（哲学）は一言にして主体性の意志の形而上学であり、「存在者の存在は近世形而上学にとって、かつそれを通して、本来意志として発言され表現されている」（ハイデガー、講演論文集 114頁）。かかる形而上学はデカルト以来ライプニッツ、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと辿られてその「完結の始まり」に達し、ニーチェの形而上学において完結の「最後の一步手前の段階」（同 81 頁）に達し、現代の技術時代を迎えて、遂にその「完成された形而上学」の出現を見ると共に、世界の夜が訪ずれ、今や故郷喪失が世界の運命となる。即ち愛知としての哲学は形而上学の完結と共に終焉し、その後には技術的知識が世界制覇を目指して、無際限の権力意志として貫徹されてゆく。只技術そのものは現実的に完結せる形而上学ではあっても哲学ではないので、ニーチェにおいて哲学としての形而上学は完結する。形而上学の完結は同時にヨーロッパ文明の終焉でもあり、それ故にこそニーチェはニヒリズムの到来の必然性について語り、ヨーロッパ文明そのものを支えていた形而上学的世界の崩壊を、「タベの国の歴史の根本的現象である」と断じ、プラトニズムによって特徴づけられる「従来的一切価値の価値転換」によって、ニヒリズムの

克服を試みようとする。「力への意志」(Wille zur Macht)こそ正に従来の価値一切の否定的転換の原理であると共に、プラトニズムに代る新しい価値定立の原理でもあり、「同一物の永劫回帰」こそその実質的内容をなすものであり、それを遂行し得る者が、キリスト教的プラトニズムに泥む旧来の形而上学的人間に対して、「末人」(letzte-Mensch)の刻印を押す「超人」(Über-mensch)に他ならない。

ニーチェはニヒリズムという言葉をも、彼が初めて認識し、数世紀以来ヨーロッパを隈なく支配し続けて来た歴史的動向を表わす名称として用い、此の歴史的動向を「神は死んだ」という命題に要約する。「キリスト教の神」は今や、存在者と人間の本質を規定し支配する一切の力を喪失し、それと共に一般に「超感性的なもの」と之についての様々な解釈、存在するもの全体に対して何らかの目的や秩序を与えんが為に掲げられた一切の理想や規範、原理や規則、目標や価値等の悉くが、その支配力を失って無力化した結果、存在者そのものもすべてその価値と意味とを失って、一切が無意味化してゆくというその運動、プラトニズムの崩壊の此の歴史的過程を指して、ニーチェはニヒリズムと呼ぶのである。ニヒリズムという此の歴史的動向の中で、全体としての存在者に関わる真理、形而上学的真理は、本質的に転化し終末へと向ってゆく。然し形而上学の終末は決して歴史の終熄を意味するわけではなく、それは「神は死んだ」という出来事との深刻な対話の開始であり、従来の価値の無価値化を、そのまま新しい価値設定の為の序曲として歓迎し、一切価値の価値転換を積極的に推し進めるべき課題として認識しようとする。全体における存在者に関わる真理の根拠づけが形而上学の本質をなす限り、新たなる価値設定の原理の確立としての一切価値の価値転換は、それ自身において形而上学的である。

7

「永劫回帰」、「力への意志」、「価値転換」、此の三つが計画されたニーチ

エの主著の全体を構成する基本語である。此のうち「力への意志」という表現は存在者の根本的性格を名づけており、すべての存在者はそれが存在する限り「力への意志」である。そして「力への意志」そのものは、同一物の永劫回帰」であるというのがニーチェの基本思想である。即ち「生成に存在の性格を刻印すること——それが最高の力への意志である」。「一切が回帰すること、これが生成する世界の存在世界への極限的接近である——考察の絶頂」(意志 617)。之がヨーロッパ哲学の全体を支配している思想であり、此の思想を思惟しつつニーチェは、彼の形而上学を以て、ヘラクレイトス対パルメニデスというヨーロッパ哲学の始源に立ち帰る。

ニーチェにとって哲学は一つの価値設定、つまり一切の存在者の如何に存在すべきかが、それによって又そこから規定される最高価値を端緒づけ、且つ遂行する基本的仕方である。ニーチェの欲したのは価値が設定されるその方法を、プラトニズムの克服において新たに根拠づける為の新しい根拠を定めることであって、此の新しい価値設定の原理が「力への意志」そのものに他ならない。即ち「力への意志」とはそれ自体既に一つの評価すること、価値定立をすることであり、然も生そのものが既にそれ自身「力への意志」であるなら、それは自ら価値設定の根拠であり原理であるからである。かくて意志はそれ自身力であり、そして力とはそれ自体において絶えることなき意欲である。意志とは「自己自身を超え出て自らの主人であること」の意味であり、自己を超出して意志することであるから、自己を力へと権能づける力強さなのである。それ故「力への意志」とは、意志そのものの本質をより明瞭にしたものである。

ニーチェの思惟によれば、一切の存在するものはその根底において絶えざる創造、つまり生成であり(ヘラクレイトス)、然も創造しつつあるものとしての存在者は、確立されたものを必要とするが、同時にそれは又克服されるべきものでもあり、かくて存在するものと生成するものとは、生成するものが存在しつつ生成し、且つ創造の中に生成しつつ存在すると解す

ることによって結合されている。「生成に存在の性格を刻印すること——それが力への意志である」というのは、生成をそのまま存在するものへと形態化し、それが生成するものとして維持され存立しうるようにというのである。此のように生成するものを存在するものへと改鑄することが最高の力への意志であり、此の改鑄においてこそ力への意志はその本質を最も純粹に発揮する。生成するものの存在者への改鑄——最高の形態における力への意志とは、その最内奥の本質において「同一物の永劫回帰」である。

「回帰」は生成するものの生成を、生成の持続として確保するという形で、生成するものの存続化を思惟し、又「永劫」とは自己自身の中へと回帰し、且つ自己自身に先駆しながら回転するという意味において、此の存立性を恒常化することを思惟している。ところで生成するものは同一物自体であり、同一物の中に或る同一なるものの生成しつつある現前が思惟されている。ニーチェの思想は生成するものの生成を、同一なるものの反復における現前性^{ウーシヤ}として、存立的に恒常化せしめることを思惟している。「力への意志」は存在者が「何であるか」(Was-sein)^{ト・タイエスタイ}について述べ、「同一物の永劫回帰」は、かかる何かという性格(本質)を持つ存在者が、事実的に「存在すること」(Daß-sein)^{ト・エステイン}について述べている。同一物の永劫回帰としての存在は現前性^{ウーシヤ}の存続化を決定する故、それは最も存続的なもの、無制約的な事実性(Daß-sein)^(註)ということになる。

生成を存在と対置させ、生成を存在に対して優位ならしめる為に、此の生成を無制約的な現前へと存続化せしめる時、生成自体は現前するものの存続性に従属することとなり、存在はその始源的な優位を譲り渡して、今や存在者性(Seiendheit)が一切となり、変転及び存続性を引き受けることとなる。即ち存在者性が無条件的に生成の要請を満足させ、此のように満足を与えつつ存在者性は自明的なものとして、そして最も収容力のある避難処として出現することになる。果かない現前の存続化を目指しての存

在者性 (Seiendheit) の企投という、形而上学の此の窮極的な形態から生ずる本質的帰結が、「生への適合性」(adaequatio) という形に均等化されて、正当性 (Gerechtigkeit) の意に転化した真理の本質の変化と、それに基づく支配力の喪失によって、無意味性 (Sinnlosigkeit) が唯一の意味となる時、一切価値の価値転換としての意味付与が始まる。そこで真理は「正当化」することとしての正義、つまり「力への意志」であり、此のような「正当化」(正義) に最も適応せるものは、只人間による無制約的な地上支配のみである。

8

こうして今や完成された「無意味性」の時代が始まる。無意味なものとは「存在」の真理の喪失したもの、存在の離脱 (Seinsverlassenheit) せるものである。真理 ($\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$) はそれが合致 (adaequatio) から確実性 (Gewißheit) へと変移する経過の中で、存在者をその工作可能性の中で保全確保することとしての、確実性へと整え組織されると共に、存在の真理に対する問いかけ一切を封じ、代って価値(目的)を作為的に述べ立て、生による新しい諸価値の樹立が試みられる。それ故完成された無意味性の時代は様々な「世界観」を考案し、力づくでそれを貫徹する時代でもある。之等の世界観は表象作用と製作における一切の計算的なものを極限にまで追求したものであるが、それはこれらの世界観がその本質上、存在者の中での人間の自立的な位置付けを目指して、地上の一切の権力手段の掌握と地球そのものに対する人間の無制約的な支配要求とから発したものであるからである。ニーチェにおける形而上学の完成とはプラトニズムの反転ではあるが、同時にそれはプラトンのイデアが近代的理性の原理となり、更に此の理性的原理が価値となった限りでは、プラトニズムの反転はとりも直さず一切価値の価値転換となる。

ニーチェは従来は一切の老朽化した諸目的や諸理想の破壊を通して、一

つの新しい「意味」「大地の意味」を設定しようと試みて、「超人」(Übermensch)を先行的に思惟したのであるが、然し「意味」とは彼にとって再び「目的」と「理想」であり、「大地」とは身体を具えた「生」と、感性的なものの権利を呼ぶ名称であった。「超人」とは彼にとって従来の人間、「末人」(letzte-Mensch)の完成であり、長期に亘って未だ確定されない動物、依然として尚お現前的な、それ自体において真なる諸理想を病的に求めて驀進する動物の確認である。超人は動物性の全権を委任されている極限的理性であり、野蛮性において完成された理性的動物である。かくて無意味性が存在するもの全体の「意味」となる。存在(Sein)に問いかけ得ないということが、存在者とは何であるかについての決定を下すのである。存在者とは何かということは放任された^{マツヘン}作為として人間自身に委ねられ、今や人間は「真理」なしに間に合わせて暮しているばかりでなく、真理の本質は忘却の中に放置されてしまっている。

完成された無意味性の時代において近代の本質は達成される。即ちその第一は基体(subiectum)として人間が、存在者全体の関連の中心に位置づけられ確保されたということであり、そして第二に存在者全体の存在者性が、製作及び説明可能のものという被表象性として把握されるということである。かくて人間を基体として位置付け確保することによって、存在するものの全体は像として、即ち「世界像」(Weltbild)として規定され、無意味性の中に近代の形而上学的構成は完成されるのであるが、此の無意味性は人間の基体への変化が、対象的なものの被表象性及び被製作性という、存在者の規定と一緒に見られる時にのみ、此の時代の本質実現として知られうる。即ち確実性が唯一のものとなるころでは、存在者のみが本質的であって、存在者性(Seiendheit)自体も、況んや存在の明るみ(Lichtung des Seins)も本質的ではない。存在の明るみのないこと、それが存在するもの全体の無意味性に他ならない。

基体の主体性が「超人」の本質である動物性の持つ理性(rationalitas

der animalitas) の中に完成され、存在者性を「力への意志」とみなす究極的な形而上学的解釈の持つ終末史的本質は、「同一物の永劫回帰」の中に把握され、その結果真理の本質にとって最も問いに値するものとなるべき一切の可能性が拒絶された儘となり、それと共に権力を与えられた無意味性が近代の地平を無制約的に規定し、近代の完成を実現するのである。近代の完成は近代自身にとっては決して硬直した終焉とは映らず、むしろすべてのものがすべてにおいて高揚し、絶えず自らを超克してゆく解放として示される。一切の行動と思惟は製作されうるものを確定することに没頭しており、到る処で不断に程よく管理された作為 (Machenschaft) が、存在者を唯一の位階に押し上げて存在を忘却せしめる。本来的に生起していることは存在者からの存在の離去である。即ち存在が存在者を存在者自体に引き渡すことによって自らを拒むという事態である。此の拒絶が経験される限り、存在の一つの明るみが既に生起しており、それは存在が存在として問いに値するものとなることにおける、始源的な最初の啓示である。近代の本質の実現としての形而上学の完成は、その歴史的根拠が、既に別の始源である「存在の真理」への過渡であるが故にのみ一つの終結である。

註 ニーチェによれば、生は力への意志に基づく生成の運動そのものであり、力への意志とは果てしなく己れを越えて自らを意志する意志であり、之こそが「生の高揚の条件」を決定し、「維持の条件」を確定する価値定立的意志として、存在の最内奥の本質をなすものであるという。此のように存在するものゝ全体が、おのれを越えておのれを意志する力への意志となったところに、近世における主体性の意志の形而上学の極限的形態が示されているわけで、例えば確実性としての真理は、「生の維持の条件」を充たす一つの価値として、その根底には「力への意志」が働いており、それと共に「確実性の真理」として捉えられた客観的表象の世界、即ち存在者の存在者性つまり「本質」は「価値」ということになり、「力への意志」によって定立された条件に貶められ、そこでは「存在そのもの」の経験への一切の途は消失し、存在は無となっている。之がニヒリズムの本質で、ニヒリズムのニヒル

とは存在者のみが存在して、存在が無となっていることを意味する故、ハイデガーによれば、ニーチェの「力への意志の形而上学」は、存在ではなく存在者の「永劫回帰」を目指すものである限り、ニヒリズムの克服ではなくて正にその完成態であり、「力への意志」という彼の形而上学そのものが既にニヒリズム的であるという。

(1988年7月)